

火の民

井上孝



孝上井民の火



筑摩書房

民の火

昭和三十三年七月十五日 発行

定価 三三〇円

著者 井上孝

発行者 古田晁

印刷者 草刈親雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(29) 七六五一・一五
振替口座 一六五七六八

火
の
民

憂心惻惻

憂え心のたよりなく

念我無祿

仕合せのない我身をおもう

民之無辜

罪も無い民びとまでを

并其臣僕

皆奴隸にする世の中だ

哀我人斯

かなしやわれら民びとは

于何從祿

どこに生きる道があらう

瞻烏爰止

見よ鳥の飛ぶはては

于誰之屋

どこの屋根に止るであらう

「詩經」

（目加田 誠訳）

第一章

一

夜来の雨があがると、二月末とはおもえない、まるで四月末かともごうばかりの陽気になった。

間をおいて舟べりをたたくゆるい波の音がつづく。さきほどから佃栄之進は口のなかで無意識にその波音をくりかえしている。ひた、また間をおいて、ひた……。それはこの舟の足音だ。舟はほとんど揺れない。まだ長崎の入江から外へは出ていないものと見える。

午さがり。ひたひたと鳴る波音からも、頬ずりするように寄ってきた春の気配が知られる。

栄之進のすわっているところから海は見えない。背丈の一倍半くらいの頭上に、一坪ばかりの広さで、四角に

切りとられた青空が仰がれる。ふつうなら舟底からそこまで梯子がかかって、甲板との昇降口になっているはずだが、いまは梯子がひきあげられているために、ぽっかりと穴だけが抜けている。雨が降れば、その穴には蓋がされて、舟底は真ッ暗になるだろう。さいわい、やわらかく晴れた南国の陽光が、そこから流れこんでいる。

たとえ光のさしこんでくる穴は狭くても、外はさえざるもの一つない海のうえである。それなのに、舟底にとどいたときの光は、とつぜん不思議なほど弱くにぶい色にかわっていた。隅のほうにうずくまっている男たちの顔がぼんやりとしか映らない。艀に積みこまれた荷物が陰をつくるためばかりではなさそうだ。舟底の床には石炭の粉がこびりついていて、糞でよごされた鶏小屋の床そっくりだった。そのせいにちがいない。せっかくの温かい明るい陽差しも、炭塵に反射の力を吸いとられてしまっているのだろう。

もともと、これは石炭舟なのである。この地方の人たちは「五平太舟」と呼んでいる。長崎から海上を六七里南々西へゆくと、高島という孤島がある。東西の長さは九町二十五間、南北の差しわたしもほぼ同じ九町二十間、

沿海線が一里あまりの小島である。島の西南に海拔四百尺たらずの権現岳がそびえていて、ほとんど平地らしい平地はない。きりたった断崖がいたところで海面につきささっている。幕末まで、長崎警備のための遠見番所が、権現岳の頂上におかれていた。たまたま宝永年間に、五平太という老人が、この高島で、燃石——石炭を発見したと言いつたえられている。だから、石炭はまた五平太の異名をもって呼ばれる。高島炭坑から燃石をはこんでくる舟を五平太舟というのであった。

長崎で石炭をおろしたこの五平太舟は、からになった艀なまこに、たくさん荷物をつみこんだ。島には、ほとんどが坑夫だったが、すでに三千を超える人たちが住んでいた。もともと島に住みついていた地元民——おもに漁師とその家族たちは二百人もいたろうか。ところが、この島では、いくら井戸をほっても塩水しか湧かなかった。こう人がふえてきては、とても天水だけでは間にあわない。だから、水舟のほかに、帰航の五平太舟も樽詰めの水をできるかぎり積みこんだ。そのほか米俵や日用品、坑木をはじめいろいろの鉱山用具、そして火薬の梱包など……。

それらは珍しいものではなかったが、ちょっと人目をひいたのは、その搬入作業を人足といっしょに五十人ばかりの異形の男たちが手つだわされたことだ。作業がおわると、波止場人足たちは岸にかえったが、異形の男たちは最後の積荷といっしょに艀へおりたまま出てこなかった。波止場人足たちは、艀から梯子がひきあげられて甲板に横倒しに投げられる音を、岸から聞いていて、荒くれ男たちにも似合わず、寒そうに肩をすばめた。

佃栄之進はほかの男たちとともに、重い梯子があたりこちにぶっつきながら引きずりあげられるのを、眉をしかめて舟底から見あげていた。梯子の消えるまで見上げていたのは、舟底にとりのこされる未練からではなく、頭をぶち割られない用心のためだった。梯子が投げだされた音をきくと、舟底の男たちは鈍い動きで悪い思いに腰をおろした。

何石舟というのか栄之進は知らない。異様なほど高い帆柱が一本つつ立っていた。艀におしこめられていて、いつ舟がうごきだしたのかも知らなかった。びたっ、びたっ……と聞こえてくる波音を口のなかで迫っている自分に気づいたとき、舟がうごいていたのだと初めてきと

った。頭のうえの板が鳴って、甲板がひとしきりざわめいた。帆綱のきしる音がした。帆が張られているらしい。やがて舟べりをたたく波の音色がかわった。

わたしゃ高島のなよ竹そだち

潮に 潮にもまれて なよなよと

アラ ショカ ショカナ

船頭であろうか。歌声が頭上の穴から流れこんできた。舟底の男たちはちよつとその美声に聞き耳をたてたが、一節がおわるのをまつて、誰かが歌声に抗うように、ア、ア、ア……と自棄じみた大あくびをした。それが合図だったように、舟底の男たちは、あたりを見まわしたり、囁きかわしたりしはじめた。

思いきり両腕をつきあげて欠伸^{あくび}ができるのも、人によつては何カ月あるいは何年ぶりのことか。いや、これからもわからない。この艀^{かた}にいるあいだけのこともかもしれないのだ。それと気がついてかどうか、なん人ももののが肩をもんだり、足をつきだしてさすったりしている。こうして体をうごかす拍子に、腰から腰につながれた鉄

鎖がザラッザラッとにぶい音をたてた。それは彼等には聞きなれた——というより、二六時ちゅうつきまどった音、いわば自分の息の音とおなじ体の音になっているものだった。

とつぜん、頭上から罵声がふつてきた。

「やめれ！　しゃべるじゃなちゅうに！　ちよつと目をはなすと、ええ気になりおつて、すぐそれじゃ！」

舟底のざわめきがつたわったのか、天井の穴から蟬^{せみ}の顔に八字髭をたてたような男の顔がのぞいた。年じゅう喚^{わめ}いているためにつぶれてしまったしわがれ声。呷^{くさ}鳴^{めい}つて、舟底をひとわたり睨^{にら}んでから、また二言三言憎^{にく}性^{せい}のような悪態をついて首をひっこめた。

あいつ、なんちゅう男か、見なれん顔じやの。なに、大石鞍馬？　あのツラで、もつたいない名じや！　長崎監獄の役人てか？　へん、カマキリ野郎め……。獄吏の顔が消えるのを待つて、男たちはさっそく渾^{あだ}名^なをつけ、また自分たちのヒソヒソ話にもどる。

舟底の男たちは、ひげがのび、よごれきった皮膚をむきだしにしているが、よく見ると、彼等の目の光は陰鬱^{いんうつ}ななかに、ふしぎな若々しさをひそめていた。各地――

―主として福岡、佐賀、さいごに長崎の監獄からあつめられてきた囚徒たちである。そのため、彼等はここで古い顔見知りよりも新しい仲間を多く見出したわけだ。

牢にいたときは、端っこに分銅のような大きな重りをつけた鎖を足首に巻かれていたが、道中をしたおかげで、それだけは脱されていた。足首のただれ工合をみれば、その男の服役の長さが想像されるというものだ。囚人たちは軽くなった足首をもみながら、新しい知合いにむかつて、自分の身の上ばなしを聞かせ、その間に相手を観察しあうのだった。袷の筒袖襦袢に腰までの股引。道中ですりきれた草鞋をはいていた。ここで一行にくわわった長崎監獄の囚徒は半数以上を占めていたが、地元だけに、彼等だけが冷飯草履だった。

佃栄之進は囚衣の襟をあわせて腕をくんだ。膝のうえにおいていた編笠が床にすべり落ちた。藁苞を半分に切ったようなてっぺんの尖った深い編笠。これをかぶると、首まですっぽりかくれてしまうが、そのかわり、どんな白昼も薄曇った夕暮の色にしか見えなくなる。

「あれは大貫新八ではなかったか……、人ちがいだろるか……」

栄之進は目をして何百回目かの呟きをもらした。囚徒の行列が福岡を出はずれて間もなくだった。彼等は鎮台兵の隊列をやりすぐすために道ばたによけて立ちどまっていた。その部隊が薩軍にかこまれている熊本城救援にむかうものと、囚徒たちも知っていた。その部隊のなかに下士官の制服をきた大貫新八の横顔を見たように思ったのだ。栄之進は思わず編笠をとうろとさえた。おりもおり、「よけろー」怒号と轟音が人々の肝をうばった。馬にひかれた砲兵隊が彼等のまえを砂塵をまいて走りすぎた。濃い霧のような砂塵がおさまったとき、歩兵隊はすでに十数間すすんでいた。栄之進は大貫新八らしい後姿をさがしたが、制服の背からだけでは、もはや見分けがつかなかった。

「まさか……。やはり他人の空似というやつだったのだろ。しかし……」

栄之進の呟きは、いつもおなじだ。

あれから四年になろうとしている。明治六年六月、栄之進を竹槍騒動にさそいこんだのは、元同藩のお小姓組にいた大貫新八その人ではなかったか。彼の運命を狂わしてしまった張本人。小倉へ行くあの道中で大貫新八に

さえ出遇わなかったら……。彼にとつては無縁の豪農とその孫娘を手にかけることもなかったろうに……。だが、榮之進は立花口の鎮守の森で大貫新八に命じられて偵察に出たまま、大貫の指揮する一団とはぐれてしまった。いっしょに偵察に出た二人の百姓——作平とは別れてしまい、もう一人の百姓千助はエタの女ぬいを助けるために、またも自分の手で殺す運命になったのだが……。それはそれとして、大貫新八は一揆を指揮していたのに、一揆鎮圧のものの、あのきびしい探索をどのようにしてのがれ、あるいは、どのように言いくるめたのか。しかも、……にわか一揆の自分が捕まり、こうして刑におちているのに、一方の巨魁とも目される大貫新八は、いま鎮台の下士になっている！ 一瞬見た横顔が、もし本当に大貫新八だったら？…… わからない……。

いつか船頭の歌声はやんでいた。帆柁が鳴った。舟の方向をかえているのか、積荷にすがっている背筋を押されるような感じがつたわった。同時に、船頭ののしる声がした。甲板にあがれば、やはり相当の風なのであらう。叫び声が吹きちぎれている。

榮之進は大貫新八の顔を払いおとすように頭をふった。

積荷作業をしているとき見た長崎の港がおもいだされた。両腕をのばして抱えこんだような入江。陽差しはもう春だ。その陽をたっぷりうけて輝いた岬の山。あかるい肌を匂わせていた入江の奥の丘の色は、いかにも南国らしくしっとりした深さをもっていた。その丘の中腹に赤い屋根が見えたのは異人館というのだろうか。山々の影をうつした静かな湾内に、あざやかな色どりの旗をひるがえした黒船が二艘、うすい煙を吐いていた。そのあいだを縫うように、和船が幾艘も櫓をおして往きかえっていた。なんという巨大さだ！ だが、榮之進の目をうばったのは、黒船の船体ばかりではなかった。遠くはなれていても、それとわかる備砲の巨大さだった。佐賀戦争のとき、官軍が誇示し、味方が恐怖したあの臼砲でさえ、ものの数ではないように思われた。彼は肝をうばわれて、じっと巨砲を見つめているうちに、彼の見なれた佐賀軍の貧弱な山砲がいつか幻影になってそれと重なっている。耳の底に叫喚がよみがえってくる。山砲が火を吹く。三瀬峠での官軍との戦闘。榮之進の目が異様な光をおびる。たしかに、彼奴は五百崎五百太だった！ イヌめ！ いつか奴には礼を言つてやるのだ……。彼は刀をつかんで

いるかのように拳をにぎりしめた。しかし、あの瘦せ大のことは、しばらく措^{はか}こう……。鎮台兵の隊列……。あれは大貫新八に間違いなかったろうか？ やはり目の錯覚だったのだ！ 身分のあったあの男が、土百姓軍隊で、どうして下士などで満足してようか。すると、やはり……。榮之進の目はうつろに沖の巨砲をながめている。握りしめられていた拳は、いつの間にか垂れた腕のさきで力なくひらかれている。おい、あとがつかえる。早よう行かんか！ 仲間を押されて我にかえる。叩ッ殺すぞ！ 怠けたい野郎は、すぐにでも極楽へおくってやるぞ！ ヘン、また足輕野郎か！ 獄吏の罵声が背後にせまった。……そのまま、鞭で舟底へ追いおとされたのである。

高島炭坑に囚人坑夫として送られることは福岡監獄を引き出されてから間もなく知った。福岡城には鹿児島から北上してくる西郷隆盛の軍を討伐にきた征討総督の本営ができていたということだった。町はごったがえしていた。榮之進ははじめ軍の使役に出たのかと思ったが、囚徒の群はそのまま町からつれ出された。戦争になって石炭がいくらあっても足りないために、それを掘りにゆ

くのだと聞かされた。いっしょに福岡監獄からひき出されながら、三池炭坑へ送られる囚徒たちと途中からわかれた。

とにかく、いままでとは異った世界がひらける。榮之進は何年ぶりかで空を仰いだ。太い息を吐いた。福岡監獄の三年！ 長かった！ 榮之進には、いまも、その感懐こそ唯一のものだ。ふりかえってみると、歳月だけが横たわっていて、苦悩のほかには記憶というものがないのだ。まったく百姓牛以下の日々だった。しかも今日からあと、いままでの年月よりも長い苦悩が待っている。どうせ高島にうつったからといって、変りばえするとは思っていない。獄吏の覚えめでたくない奴ばかり選りだされているところから察しても、待ちかまえている運命が想像されよう。しかし、高島の苦役がどうであろうと、賽^{さい}の河原の石つみのような毎日毎日の瓦焼きや芦編み作業よりは、まだましにちがいない。いま榮之進は高島の苦役を誤算しているのかもしれない。

福岡監獄では、まず初めにへんてつもない芦編み作業につけられた。士族あがりには百姓とちがって、力仕事に不向きだからか。これも、あるいは身分的な優遇という

わけか。だが、その単調さにはほとんど堪えられなかった。半年一年とたつて、仕事になれば慣れるほど、狂うほど気が滅入った。習慣的な忠実さで、手足の指は機械のようにうごいている。彼は生来の無口に輪をかけたようになった。とつぜん、おのれを忘れる焦躁につきあげられることがあった。そんなとき、彼は同囚と争い、役人に反抗した。杖で半死になるまで打ちのめされる懲罰をなんとか受けた。皮膚はやぶれ血がにじみ出る自分の臀肉をいたわることさえ厭きてしまつて、放心の何日かがつづく。われに返る。彼は自分の手の指足の指が、また蓆をあんでいるのに気づく。彼はぬいにくらした幾月かを想いだそうとする。しかし、ぬいの顔がはつきり想い描けないのに気づいて愕然とするのだ。彼女の面影をとらえようと悶える。どうしたことだろうか。おれはぬいを忘れかけているのか。喪われていく自分を感じて慄然とした。ぬいの面影が遠のくとは逆に、三代の部落で手につけた老人と孫娘の最後の悲鳴と形相が一日一日と鮮かさを増してくるのだった。夢のなかで彼は夜毎その復讐をうけてうなされた。榮之進は逃げまどい、憔悴し、唱えたこともなかった念仏をさえブツブツつぶや

いていることがあるようになった。このままでは、刑期をおわらないうちに、魂が消えるようになって死んでしまふか、一滴一滴と血が白んできて狂氣してしまうのではあるまいかと思つた。必死にぬいの幻影にすがりつけばつくほど、彼女の面影はかすんでゆく……。そんなときだった。高島送りがきまつたのだ。鬼が出ようが蛇があらわれようが、とにかく変化のおこることだけは確かだ。榮之進は長崎までの道中、風物の変化に接しただけで、いくらか目の色の輝きをとりもどしたようだ。

とくに道中の榮之進の期待は、佐賀の町が見られる！ただ、そのことにかげられていた。それが、彼を生き生きとさせた。佐賀の生家に母と妹をのこして、福岡の伯父のもとへ金策に出かけたのは、いつだったろうか。そうだ、明治六年の六月であつた。その日から四年たらずなのに、佐賀を出てから十年も二十年もたったような気がする。時間を踏みはずして駆けまわっていたようなものだ。佐賀戦争のとき、征韓党にくわわつて戦ったけれど、そのときも彼は、つい目と鼻の先きの三瀬峠にいながら、とうとう佐賀の町へは一步もはいる機会のないまま、たたかいは敗れて、あらぬ方角へ奔つたのだ。こん

どこぞ、佐賀の町が見られる！ 楠木の森にかこまれた懐しい故郷の町！ たとえ母も妹も行方知れずになっているとしても、その町を見るだけで、どのくらい心が癒されるかしない。栄之進は心をふるわせて一歩一歩あるいた。……ところが、どうしたというのだろう！ 肥前の国にはいつて神崎までくると、どうした都合なのか、囚徒の一行は北の山ぞいの間道を進みはじめた。佐賀はもう、そこなの！ いまに佐賀の町の方へ道を折れてくれるか折れてくれるか……ついに、その願いはむなしかった。一行は山麓を縫いつたて、佐賀の町を大きく北へ迂回した。栄之進が見た大きな町は、佐賀からはるかに西にあたる武雄の町だったのだ。それから長崎まで、栄之進はほとんど口をきかずに足をひきずって歩いた。おれは、もう、故郷の町にも会えないのか……。

積荷作業ちゅうに見たのだが、長崎の入江を抱きこんだ岬のむこうに、かすんだ島影がうかんでいた。天秤がわりの丸太ン棒に水樽を通しながら、相棒になった長崎監獄からの囚徒がおしえてくれたところによると、あの左のほうが香焼島、右側に見えるのが伊王島の一部だという。しかし、栄之進の目には、その二つの島がかさな

って見えて、長崎湾の入口を一つの島が蓋かたをしているように思われたものだ。海のうえにも陽炎かげろふはたつものだらうか。入江の出口からさきは霞んでいた。長崎の囚人はつづけて言った。伊王島と香焼島のあいだに狭い水道があつて、大中瀬と呼ばれている。舟が大中瀬にさしかかるまえころから、香焼島のちょうど右肩とでもいったあたりに、高島の島影が見えはじめるということだった。大中瀬を抜けると、高島まで海上あと二里ばかりだという。

「わたったことがあるのか」栄之進は水樽を鎗におろして、また岸へとつつかえしながら、長崎の囚人に小声できいた。

「わたったことはなかばってん、噂は何度もきいた。なんでも、えらい島じゃちゅうばい」長崎も声をひそめた、「むかしは長崎監獄からだいぶん送りこまれたばってん、一人ももどつてきた奴はなかなげなばい。島で放免になったのか死んだのか訊きようもなかけん、わかりやせん。なんでん、去年の夏の話ばってん、坑内が火事になったとき、ほかの坑道に燃えひろがるのをふせぐために、坑道の入口ば石や泥つめて蓋してしもうたちゅうばい。あ

たりまえじゃ思うかい（あたりまえだと思われるか、あなたは）？ そのとき、まだ坑内に何十人ちゅう人間がのこつとつてもか？ ほんなこつ（本当だ）！ 逃げおくれた奴がいつばい中におつたとばい！ 助けてくれ、助けてくれちゅうて喚きながら地の底から走り出てくるまゑに、坑道ばふさいだとばい！ なんば五平太が大切じゃちゅうても、人間ば蒸焼きにするこたアなか！ そんな噂はザラじゃ。おかみのさっしやる惨酷さは、行つて自分の躰ではかつてみんでも、これまでに監獄でたいがい納得のいっつとるばつてん、場所がかわればテもかわるうもん、ひとしお用心ばするこつたい……」

「燃石と人間の重さば、おんなじ嵩ではかつてみれ」火薬箱をかついで榮之進のうしろから渡し板をのぼつてきた男が、獄吏をはばかりて独り言のように言うのがきこえた、「燃石のほうがズンと重かばい。あの島では、人間の命は紙屑より軽かとじゃ。まだまだ牛や馬のほうが力持ちじゃちゅうて大切にするいうげんね……」

おーい……。船先で船頭が叫んでいるようだ。榮之進はわれにかえた。おーい……。べつの叫び声がかえってきた。はじめの声が波頭にこだましたのではあるまい。

鎖の男たちは聞き耳をたてたが、それきり呼びかわす声は絶えた。五平太舟でもすれちがったのだろう。男たちはなんとなく想像した。舟はいったいどのへんを走っているのか。だいぶん舟足は早くなつて、ところもち前後にゆれはじめた。ひたひたと舟べりをたたいていた音は、いつか水を切る音にかわっていた。

一人が水樽に背をもたせかけていた躰を、ずるずると横ざまに倒した。どぎゃんしたとな？ ぬし（おまえ）は初めて海に出たとじゃろ？ 気分でも悪うなつたとかや？ 男は目をつむつたまま黙っている。そして、さらに躰をずらした拍子に、すぐそばの二三人の鎖がひびばられて音をたてた。

八字髭のカマキリは、その後のぞかない。臥ているところを見つかれば、ただではすむまい。海の上じゃ。逃げきる奴はおらん思うて、役人ども、安心ばしくさつて、酒ば食らいよるとたい……。たれかが天井を見あげながら呟いた。それに、囚人のお守りで当分がところ島流しみたいなもんじゃ。腹ばかり（腹をたてて）ヤケ酒くらいよるとたい……。まえの声をたれかが受けた。なるほど、ときれときれに手拍子とつた歌声らしいものが聞

こえてくる。護送役の獄吏たちが甲板で酒盛りでもしているのだらう。耳をすましても歌詞はききとれない。

「なにば歌いよるとや？」草鞋ばきの男がたれにとまなく訊いた。

「知らんとか？」

冷飯草履の男が声の主を見かえした。すると長崎近在の歌であらうか。長崎監獄の男はちよつと唇をゆがめて、あたりを見まわし、天井穴をふり仰いだ。二三度あたまを振って居ずまいをなおした。やおら、まわりの数人だけに聞こえる低い声で歌いはじめた。

唐津下罪人の スラ曳く姿

いかな絵描きも かきやきらぬ

長崎監獄は一節うたいおわると口をぬぐった。うえて役人たちが手拍子とつて歌っているものと、とてもおなじ歌とおもえない、しみ入るような哀しい調子だった。「もう一べん歌うてくれ」

二三人に所望されたが、長崎監獄は天井を見あげて頭をふった。

「なアに、心配なか。役人どもの耳は酔いくろうて腑抜けになつとるばい。それにしても、顔に似合わん、よか声ば持つとらす、ぬしは！」そばの一人が感嘆した、「そればつてん、スラちゅうのは、なにかいた（なんですか、あなた？）」

「こいつは、わしらをうとうた歌たいな」長崎監獄はせわしげに目ばたきしながら応えた、「スラ？ そいつは、いまに、判らうたい。あんまり早ようから知らんほうがよか。楽しかもんじやなからしかど……」

脅かすように呟いて、それきり黙ってしまった。榮之進は長崎監獄から目をそらした。スラ？ なんだつてよい。これから無数に、そのような炭坑言葉をおぼえるだらう。それより、囚人の蒸焼きでは地獄の鬼も不味^{まず}からう。この後まるまる五年の刑がのこっている。未来の一日一日はけつして自分のものではない。さきのことを考えても仕方がない。とにかく、島流しとは、このことだ。榮之進はふーっと息を吹きあげてから口をとじた。なるようになれ……。

そのとき、なにか言いたげに榮之進の方をむいた男が、はぐらかされたように戸惑った顔をした。福岡からいっ

しよに道中してきた仲間の一人だ。監獄のなかでは顔を
しらなかつたが、福岡を出発した二十人ばかりの囚徒の
うち、途中から半分以上が三池炭坑へ送られたために、
いまこの舟の中にいる囚徒では、福岡から来たものがい
ちばん少なかった。おなじ監獄というだけで氣持に妙な
近しさがわくのも不思議だ。それに、榮之進に話しかけ
ようとした若い男は、長い道中のあいだから、榮之進と
親しくなりたがつている素振りがみえた。機会をみつ
ては、なにかと話しかけた。榮之進のことを誰かからき
いて、いくらか知っているのかもしれない。だが、榮之
進は無口で殊更はなしかけられるのを嫌っているふうに
もみえた。道中は獄吏の監視がことのほかきびしく、や
たらに口はきけなかつた。この舟底の一瞬のように自由
に話しあえる機会はまたとないかもしれないのだ。しか
し、話しかけようとした相手の榮之進は腕を拱いて目を
つむってしまった。とつつきにくい男たいな……。

話すきらしい若い囚人は落胆したが、運よくこちらに
向いた一つの顔に氣がついた。「唐津下罪人……」をう
たつた男だ。そう、そう、ぬしは長崎たいな？ 相手が
うなずくのを見て、クンとなにやら満足げに鼻をならし

た。わしは福岡からたい、新次ちゅう水呑たい。名乗り
をあげている。目をつむっている榮之進の耳にもおのず
からはいってくる。

「ぬしはあと何年つとめんならんとかや？」

新次は長崎にかたどおりの質問をした。

「わしはまだ来たばつかりたい。生きとれば、あと五六
年は追いまわされようたい」

「なるほど、まだコヤシの臭いがぬけとらんばい。わし
の鼻はたしかばい。どうじゃ、ぬしも百姓たいな？」

「百姓ヅラはかくせんもんばい。わしは仙助ちゅうが、
若うて力があつて、牛のごと働けそうな奴ばつかり選つ
て高島へ送れちゅう注文らしかね。そんなら百姓しかな
かろ？」

「そう言や、よか休しとる。シンが強そうじゃ。まるで
青大将のごとある」どういう連想からか、新次は仙助に
奇妙な渾名あだなをつけてから、お定まりの質問をした、「……
で、何やつて、ブチこまれたとかいた？」

「放火ひやうかちゅうことになつとる」青大将は目ばたきしなが
ら他人事のように言つた。この男のせわしげな目ばたき
は癖というより、百姓におおい目の病氣のせいらしい。

「火ツケー」新次は、自分の声に首をちぢめて、天井を見あげたが、「火ツケ人殺しは打ち首じゃろうもん、よう五六年ですんだばいな」

「一人でやったとじゃなかけんね」

「ははん、わしらとおなじ一揆か……」そそのかすように新次は片目つむつてみせた。

「わしは一揆じゃなかつてん、まあ似たようなもんだいな」仙助は相手の目を見つめていたが、だんだん自分をおさえきれなくなったらしい口ぶりでしゃべりはじめた。「聴いてくるるかいた？（聴いてくださるか、あなた？）わしは残念で残念で死のうごであるたい！それというのも、あの地租改正たい。わしらのところで、戸長で区長も兼ねとらす倉本ちゅう分限者^{ぶんげん}がおらすとじやが、そいつが悪党でう。自分の地位ばよかことにして、入会地をわがものに取りこんだり、そればかりか、貸金の抵当にはいっとる田地ば横領しくさったとたい。聞けば日本じゅうどこでもあったことらしいかな。早よう言や、天朝さんのお布令は、こいつら悪党どもの横領ば^よ陵^{りやう}かしたり守つてやつたりするためのもんだい。米の値はあがる一方じやが、地主がおかみにはらう地租は今年

の一月から、三分が二分五厘にさがったとじゃろ？ 竹槍でドンと突きたす二分五厘……。そうはいうても、ぬし等でも、地主をもうけさすために一揆おこして監獄にきとるとじゃなかる？ それが、そうなつとるじやなか！ 小作から年貢ば取りたてて、納めきらん奴は突きだされて監獄ゆき。はたらかん地主は濡れ手に粟で太るばかりじや。はたらかんもんじやから、欲心ばかりがサカリのついたごとと滾^{たぎ}りよるとたい。倉本の奴がそうじや！（しだいに昂奮^{かうふん}してきたらしく、青大将は早口になり、ときどき舌をもつらした）うちの村の百姓六十人ばかりが、ご一新まえから質入れしとった二十五町歩ばかりの田地ば、地租改正のドサクサに、字の読めん百姓一人一人に判コばベタベタつかして、いつの間にか自分の名儀にしとったとじや！ わしら、それと気がついて仰天したばい。かけおうたが耳ばかそうか！ とうとう、土地ば返してくるごとと骨折つてくだされちゅうて、みんなで警察にたのんだたい。この事件に損得の關係のなか村のものもみんな、わしら六十人の言い分の正しかととば認めてくれて、地主のきたなか遣り口ば言いたてたもんじやけん、さすが地主の手先ききたいな警察も、ま